

謹んで

故 港道隆教授のご霊前にこの論文集を捧げます

## 港道隆先生を追悼する

文学部長 木 股 知 史

2015年の春浅い頃、港道先生の訃報が届いた時は、前年の秋以来、入退院を繰り返しておられていたことを知っていたので、ある程度の心の準備はできていたとはいえ、深い寂しさを感じた。港道先生は、人間科学科の創立以来の中心であり、ジャック・デリダやエマニュエル・レヴィナスを中心とする現代思想の研究では、重要な業績をあげておられ、甲南大学の文学部を代表する研究者であった。研究の収穫期に入ろうとするところで、病に倒られたことは、無念きわまりないことである。哲学を生きることによって、常に思索と教育をつなげる実践をされようとされていた先生を喪ったことは、大きな痛手でもあった。

先生はフランス現代思想がご専門で、日本近代文学専攻の私とは領域が異なるが、何度か交流の機会があった。そのことをふりかえって、先生を追悼したい。

上田敏の訳詩集『海潮音』には、エミール・ヴェルハーレンの詩「鷺の歌」が収められている。原題は、Paraboleで比喩という意味であるが、上田敏は、「鷺の歌」が象徴詩を代表するものだという解説を書いていた。その訳詩の一節について、フランス語がよくわかる方に聞いてみたいとかねがね思っていた私は、ある日、港道先生の研究室を訪ねた。授業が終わったあとらしく、先生はくつろいだ感じで対応された。こちらは、ほんの数分ですむと思っていたのだが、先生は、その一節が全体の構成と関連しているということを、辞書を引きつつ時間をかけて詳しく説明してくださった。こちらは、語学ができるということを持たず理解していたのだが、港道先生の態度は、言語を思索のあらわれとして見ることを示していて、学ぶところがあつた。後に、先生が、翻訳を重要な仕事と考えられていたことを知ったが、言葉が抱えている深さをどうして伝えるかを常に念頭に置かれていたのだと思う。

小さな仕事を先生にお願いしたことがある。大森荘蔵についての簡単ではあるが、しっかりした紹介が必要だが、書ける人がいないだろうかという問い合わせが出版社からあつた。高等学校の国語教科書に大森荘蔵の「時を刻み切り取る」という哲学エッセイが掲載

されることとなったが、教師用指導書に人物紹介と教材文解説を執筆できる人を見当たらず、困っていたのである。すぐ私は、港道先生なら書いていただけたらと思った。今から思うと、本筋の研究と教育で忙しいはずの先生に啓蒙的な仕事をお願いしたのは、迷惑だったかもしれないという反省の念が起きるが、私はこうした啓蒙的な仕事も、先生は関心があれば受けてくださるのではないかと確信していた。できあがったものは、特色ある大森荘蔵の解説となっており、その時間論や想起論について、さまざまな角度から思索がわかりやすく展開されている。丹念に一つ一つを言葉の思索によって積み重ねていくという大森荘蔵の手法は、港道先生にも共有されているものだと感じる。

港道先生の書くものは難解だとよく言われるようだが、それは、扱っている問題の困難さの反映ゆえのことであつて、言葉による思索によって、現実が抱える困難に迫る行程は、いつも明瞭であつたと、私は考えている。芥川龍之介の『藪の中』についての考察も残されているが、そうした専門外の、哲学の応用領域についての関心を禁欲的に排除しないところが港道先生の思索の一つの特質ではないだろうか。

近年の社会的トラウマや国民国家、労働への関心は、新たな展開を予感させる内容に充ちていたが、あまりに重い思索的課題を背負われることになつたのではないかと、傍目からは見えることもあつた。

しかし、社会と対峙する道を選ばれた先生には、常に、正面から引き受けるという態度のみがあつたのだと思う。奥様のお話では、これからの課題として、「資本主義は宗教である」ということを論証するということがあつたという。今私たちを律している貨幣経済や経済合理性というものも、中世における宗教と同じものではないのか、という問いかけが先生にはあつたのだろう。この論文を読むことができないのは、残念である。

港道先生の教育への熱意と学問上の業績は、甲南大学文学部の伝統に深くつながることを確認しつつ、追悼の文章を閉じることとしたい。